



I know 『Shall we ダンス?』

周防正行

1996年1月に日本で公開された映画『Shall we ダンス?』は日本国内で日本映画としては珍しく大ヒットしました。そして、アメリカでの公開もすぐに決まったのですが、それも日本映画にとっては異例のことでした。

アメリカで公開され成功した日本映画は黒澤明監督作品や伊丹十三監督作品などほんの数本しかありません。

日本の特殊なサラリーマンや社交ダンスを扱った私の映画がアメリカでどのような評価を受けるのか、とても楽しみでしたし、不安でもありました。

結果は、日本映画としては過去最高の大ヒットを記録し、たくさんの賞もいただくという、大成功でした。

私が一番驚いたのは、アメリカの観客の反応が日本の観客の反応とほとんど変わらなかったことです。つまり、主人公の中年ビジネスマンに感情移入し、その生き方に共感を覚えてくれたのです。笑うところが一緒なら、泣くところも一緒です。日本の文化の特殊性がアメリカ人の興味をひいたのではありませんでした。現代の日本人が抱えている問題が、そのままアメリカ人の問題でもあったということです。

アメリカのマスコミはこの映画のテーマは「ミッドライフ・クライシス (midlife crisis) であると言いました。日本語にすれば「中年の精神的危機」といったところでしょうか。映画が成功した理由の一つは日米のテーマの共通性だったのです。

そしてもう一つ、大きな理由がありました。

「暴力とセックスのない映画をありがとう」

私はアメリカで試写会に立ち会う度に、そう観客に感謝されました。新聞や雑誌にも必ずといっていいほど、「誰でもが安心して楽しめる映画」と書かれました。それは今、アメリカで作られている数多くの映画が「暴力とセックス」に溢れているということを示しています。私は監督として、必ずしも暴力やセックスを扱うことが悪いことだとは考えていません。むしろその二つは人間にとってとても大きなテーマであると考えています。ただ、あまりにも安易に「暴力とセックス」が扱われていることは確かでしょう。

私はアメリカでの成功を通じて、確実に世界が狭くなっていることを実感しました。日本の問題は、もはや世界の問題なのです。同じように世界のどの国の問題も、日本の問題なのです。今、国境は地図の上だけの存在になりつつあるのかもしれない。

(映画監督)